魔装転生

ライブΩ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔装転生

【Ｎコード】

Ｎ８７５１Ｎ

【作者名】

ライブΩ

【あらすじ】

社会人　東　信（２１）は日々のサービス残業に休みがほとんどない状態で働いていたのだが、年に一度の２連休の前日に期待を胸に連休の過ごし方を考えつつ就寝。しかし、起きてみれば…

001

僕、東　信（２１）社会人（一人称は僕派）
今日も今日とて当たり前のように残業して家に帰れば深夜１時、もちろんサービス残業なわけですが…
確かに仕事は辛いけど、明日からは待ちに待った年に一度の２連休なのですよ！！
期待を胸に明日からの予定を考えつつ就寝。
明日は何しようかなぁ…ｚｚＺＺ

（ココドコ？あ、夢かな？）
なんて思うのも仕方ない。まわりは真っ白で、霧の中のような雲の中のような、１ｍ先も見えないんじゃないかってくらいなのに目の前の神殿？みたいなのはハッキリ見えてるという不思議空間に立っていた。
「たぶん夢だな」
とか言いながら神殿みたいな建物以外に何かないのか見回してると、
「ここは夢の中ではないですよ」
なんてアニメ声が背後から聞こえてきた。
急な声に少し驚きながらも
「じゃあ、ここはどこ？というか、どちら様でしょう？」

と、質問した。（驚いたけど意外と冷静じゃないか、僕！）

振り返りよく見ると、年の頃１７～１８くらいの黒髪を腰の辺りまで伸ばした美人さんがいた。

（えー、せっかくの美人なのにアニメ声かぁ…すごいギャップ）

なんて失礼なこと思っていると、

「見た目と声が合ってないの気にしてるのに…」なんて言いながら美人さんが落ち込んでいた。「いや、ゴメン、口に出して言うつもりなかっ……あれ？僕、口に出してた？」

急に落ち込む美人さんを前に、とにかく謝ろうと思ったが、謝ってる途中で違和感を感じた。

「私は世界の管理者です。あなた方が認識するところの神にあたるのかな？」

……え？どゆこと？

「説明するとですね、ここは夢の中ではなく世界の狭間の空間で、私は世界の管理者です。そして、あなたは死んでしまったんですが、魂が輪廻に戻る前に私がここに連れてきたわけです。」

「えっと…僕、死んだの？なんで？」

「死因は過労死ですね。」「……納得できるのが悲しい。。。」

「受け入れるの早いですね！？というか、納得できちゃうんですか？」

「だってねぇ…勤めてた会社、労働時間長いし休みないからさぁ」

「なるほど、大変でしたねぇ…」

そんな同情的な目で見ないでっ！！

「それで僕はなんで輪廻に戻されないの？」
僕は美人さんがさっき言ってたことの中で疑問に思ったことを聞いてみた。

「それはですね、本当はあなたはまだ死ぬはずではなかったんですよ。」

「それは、どゆこと？」
「この世界は私が管理している世界の一つなのですが、一人で管理してると手が足りなくて、たまに管理から外れた存在が発生するというか、ぶっちゃけ管理ミスでして世界のバグに対する処理が遅れて事故が起こるんです。
いつもなら修正すれば問題ないんですが、あなたの場合は修正する前に死んでしまったので修正できないんです。」

「……マジですか？」

「マジです。」
「じゃあ、どうなるんですか？」

「元いた世界に転生して別人としてやり直すこともできますが、私が管理する別の世界に転生することもできますよ？」

「それは…異世界になるのかな？」

「そうですね、理解が早くて助かります。今は魂だけの存在なので、生き返るのではなく転生することになるのですが…」

「今の記憶とかはなくなるの？」
「元の世界に転生する場合は、転生前のあなたを知る人がいるので都合が悪いんですが、別の世界に転生するなら希望すれば記憶をそのままで転生できますよ。」

「けっこう融通きくんだ？」

「今回のような例は、こちらのミスなので、出来る限りの希望は聞きますよ。」
「じゃあ、記憶はそのままでお願い。あ、そういえば、僕が転生する世界ってどんなとこ？」
「簡単にいうと、剣と魔法がある世界です。」
「なるほど…」
「転生したあと、不自由しなくていいように魔力と身体能力を上げておきますね。」

「そんなこともできるの！？」
「管理者ですから♪他に希望はないですか？」
「なんでもいいの？」「大抵のことならかまいませんが、あんまり多くは無料です。」

「じゃあ、五つくらいならできる？」

「それくらいなら問題ないです。」

「とりあえず、全ての魔法が使えるようにしてほしいかな。」
「それなら、魔力と身体能力を上げるついでに才能として付加してますよ。あと、剣術や体術の才能も付加してます。」

「じゃあ、特殊な能力が欲しいかな…」

「どんな能力ですか？」

「色々なものを分析できる能力と物質の合成と錬成。」

「ちょっと待ってくださいね……分析能力は問題ないです。合成と錬成は生物は対象外になってしまいますけど、どうします？」

「それでいいよ」

「五つの希望まであと二つありますけど？」

「じゃあ、転生後の性別は男がいいな。あと、名字はいいけど、名前は気に入ってるから転生後も使いたい。」

「それも問題ないですね。」

「じゃあ、その五つでお願い。」

「はい。では、転生させますね。」

そういって、美人さんが手を僕に翳すと同時に僕の意識が薄れていった。

（あ～、美人さんの名前聞いてないや…）

００２（前書き）

そういえば、主人公の転生後の名前がまだ出てなかった…

002

あの不思議空間から転生してから何だかんだで5年たち、僕はすくすく育っているわけなんだが、この世界は『ケルト』というらしい。なんでも3つの大陸と2つの諸島があって大陸には4つの国が、諸島にはそれぞれ1つずつの国があるらしい。

大陸にある国はどれも大国で、諸島の国は小国に分類されていて…って

（全部で6つしか国がないのかよっ！？）

とか思いましたよ…

大陸は大きい順に

カデナ＞エトミナ＞ロルト

と呼ばれていて、カデナに2つ、エトミナとロルトに1つずつ国がある。

カデナにある国は、1番大きなカデナ王国と2番目に大きなシトー帝国があり、

エトミナには商業が盛んなカール中立国が

ロルトには魔法の研究が盛んな魔法国家ロルトがある。

ちなみに、魔法国家ロルトには魔法学院があるらしい。

（魔法学院って、ファンタジーだな…）

現在、カデナ王国とシトー帝国は戦争ほどではないが国境付近での小競り合いが頻発していて、「その内戦争になるんじゃないか～…」なんて僕の両親は話していた。

2つの諸島のほうはマルクス諸島とスーラン諸島と呼ばれていて、マルクス諸島にはマルクス王国、スーラン諸島にはスーラン共和国がある。

で、この世界には世界の管理者の美人さんが言ってたように魔法が存在していて、さらに魔法だけでなく魔力動力炉とかいうエンジン？で動く『魔装機人』なるロボットがあるとか…

（すげー！ここは魔法と科学が発達しているのかっ！？）

なんて思っていたんだけど、調べてみたら『魔装機人』は召喚によって呼び出すもので、人の手で造り上げたモノではないらしい。

どこから召喚するのかとか、誰が最初に見つけたとかは文献が残ってないのだとか…

まぁ、それは置いといて、

『魔装機人』を召喚できる人達は『魔法騎士』と呼ばれていて、魔法が得意なだけで『魔装機人』を召喚できない人達は一般的には『魔法士』というらしいのだ。

『魔法騎士』は『魔法士』のように魔法が得意で、さらに『魔装機

人』を召喚できるということなのだ。

しかも、『魔法騎士』は『魔法士』より魔力総量も多いとか……半分チートじゃないか！

ところで、なんでまだ5歳なのにこんなこと調べたのかというと、ぶっちゃけ娯楽がないのですよ…

ヒマだけど、親父の書斎で本を読むくらいしかすることないというで、親父の本を読み漁ってたら両親が

「まだ5歳だし、きちんとした教育を受けてないのに高等書籍を読めるなんて天才なんじゃないか！？」

なんて興奮してたよ…

なんか魔力と身体能力だけじゃなく理解力の補正まであったみたい。

魔力のほうは、親父の書斎に初級の魔法書（初級魔法の魔法書は普通に本屋で売ってるらしい…安くはないけどね！）があったから、試しに魔法書読みながら魔法を使ってみた…うん、普通に使えた、才能くれたの本当だった。身体能力のほうは…客観的に見て5歳児の動きから逸脱してたね。

そんなこんなでさらに七年過ぎて１２歳になりました。

１２歳になったらロルト魔法学院の基礎学科の入学試験を受けることができるので、試験を受けることになったんだけど、ロルト魔法

学院には基礎学科と上級学科があって１２歳〜１４歳は基礎学科、１５歳〜１７歳は上級学科と分かれてるらしい。

（なるほど、中等部と高等部みたいなもんか…）

前世ではもう社会人だったから、もう一度学生ができるのが嬉しかったり。

しかも、魔法学院とか…テンション上がるじゃないか！

なんでも、事前に調べたところ魔法学院は首都にありそうなイメージだったんだけど別の街にあるらしく、実は魔法学院を中心とした学園都市にあるらしい。

今から行くのが楽しみだなぁ♪

さてさて、魔法学院は色々な国からの入学希望者を受け入れていて、全寮制なわけですよ。

試験前日に宿屋で部屋を借りて翌日の試験、受かれば更に翌日に入学手続きと入寮ってな感じで寮生活が始まるらしい。

だから僕もでっかいトランク持ってやって来ました学園都市！

街の入口に兵士の兄ちゃんがいるぜ…

「すいませーん、魔法学院の試験受けにきたんですけど。」

「はい、じゃあ身分証代わりに受験票見せて」

「これですか？」

「オッケー、通っていいよ」

「ありがとうございまーす」

ちょっと緊張したけど、すんなり通れたな…てか、兵士の兄ちゃんノリ軽いな。

それはさておき、取りあえずは宿屋だね。

はじめての街なもんだから、あちこち見ながら歩いていると同じ年くらいの女の子が大きめの建物の前でなにやら中の様子を見ているみたいだ。てか、ここ宿屋じゃないか…

声かけてみよう。

決してナンパじゃないよ！ホントだよ！

「入らないの？」

「っ！？…あ、いや、入りたいんだけど一人じゃ入りにくくて」

ちょっと驚かせてしまったみたい…

「ここ宿屋でしょ？宿屋使ったことないの？」

「住んでた街から出たことなかったから、宿屋使ったことない…」
なるほど……そういや僕も街から出たことなかったな。
「僕も宿屋に泊まるのって今回がはじめてだから、一緒に入ろうか？」
なんか、連れ込んでゲフンゲフン
「そうなんだぁ、じゃあおんなじだね。」
「僕はシン・ラインベル、魔法学院の試験を受けに来たんだ。」
「私はマリナ・マリス、私も試験を受けにきたの。」
「じゃあお互い明日は頑張ろう！」
「うん！」
僕たちは自己紹介をすませ宿屋に入った。
なんと部屋はお隣さんでした。
ちなみに、マリナは髪は綺麗なブロンドで碧眼のカワイイ系だった。
部屋に荷物を置いたのはいいけど、まだ日は高い。
昼飯時なこともあって街を散策がてら昼飯でも食べるとするか。

マリナも誘ってみよう。
部屋にいるかな…

コンコン

「マリナ、いる？」

「はーい、ちょっと待って。」
どうやら部屋にいたようだ。

「どうしたの？」

「今から昼食と街の散策で出かけるけど、お昼まだなら一緒に行かない？」

「行く行く！準備するからまってて。」

「じゃあ宿屋の入口で待ってよ。」

「はーい」

ということで、マリナと昼食&散策に出たわけですが、なかなか活気があるし露店なんかも出てるから楽しいかったし、いい感じの食堂を見つけて入ってみたらなかなかおいしかった。

夕方まで街の散策して宿屋に帰ってきたんだけど、はしゃぎすぎて疲れた…

そうそう、学院を見てきたんだけど、一言で言うとデカイ！

あれはもう城だね！キャッスルだよ！

街の入る前にすでに外から城が見えてたんだけど、まさかあれが学院だったなんて…

そんなこんなで夕食はこれまたマリナと宿屋で食べて明日に備えて寝ることにした。

オヤスミなさい…ｚｚＺＺ

お風呂はちゃんと入ったからね！

００２（後書き）

小説書くのって難しいですね…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8751n/

魔装転生

2010年10月9日03時31分発行